



建学の精神

明治学院の起源は、1863年(文久3)にアメリカ医療宣教師 James Curtis Hepburn の横浜の住居に開設されたいわゆる「ヘボン塾」にあり、今日の1中学・2高校・大学(6学部)・大学院(7研究科11専攻)を擁する総合的な学園にまで発展してきた140余年の歩みを貫き、**「キリスト教に基づく人格教育」**という建学の精神を堅持しつつ、我が国教育界に独自の寄与を果たしてきています。



明治学院 校章・マーク
明確な資料はありませんが、前身の東京一致英和学校(Union College)の校章が、現在のMとGと同じ形でUとCを組み合わせたものであったといわれています。

学校法人 明治学院

〒108-8636 東京都港区白金台1-2-37

TEL：03-5421-5101 FAX：03-5421-5451



創立

医師としてニューヨークで病院を開業していたヘボンは、同じ志を持つクララ夫人と結婚、ともに宣教の途につきました。ヘボン夫妻の宣教は、当時シャムと呼ばれたタイ王国への派遣から始まりますが、航海中にクララ夫人が流産を経験、経由地のシンガポールで宣教地を中国のアモイ(廈門)に変更します。アヘン戦争のため、シンガポールで足止め中の2年間に授かった次子も、生後わずか数時間で失いました。赴任したアモイでは夫妻ともにマラリアに罹り、伝道を断念してアモイで誕生した息子サムエル・デビットとともに1846年(弘化3)3月失意のうちに帰国しました。このような経験を経ながら、14歳になった息子サムエル・デビットを人に託し、ヘボン夫妻は新たな伝道の地 日本に向かい、開港わずか4カ月後の1859年(安政6)、3名の宣教師とともに日本の土を踏んだのです。

アメリカの〈長老教会〉と〈オランダ改革派教会〉から派遣されたのは、ヘボン、ブラウン(Samuel Robbins Brown 1810～1880年)、シモンズ(Danne B.Simmons 1834～1889年)フルベッキ(Guido Herman Fridolin Verbeck 1830～1898年)の4名でした。ヘボン、ブラウン、ゴープルそして新婚早々の若きバラ(James Hamilton Ballagh)夫妻には、神奈川の成仏寺が宿舎として与えられ、3年間に及ぶ共同生活が始まりました。当時、日本人にキリスト教を布教することは幕府より禁じられていましたが、医療行為は黙認されました。ヘボンは医療伝道に従事し、シモンズも協力しました。聖書の日本語訳のためにも辞書の必要性を認めていたヘボンは、診療を行ないながら日本語研究に取り組み、和英・英和辞書『和英語林集成』の出版や、日本語を発音からローマ字表記する〈ヘボン式ローマ字〉法を考案しました。

教師経験のあるクララ夫人は英語を教え始めます。1862年(文久2)夫人が一時帰国したとき、ヘボンは幕府の要請で大村益次郎を含む委託生9名を預かり、代数・幾何・英語を教えました。日本最初の男女共学のヘボン塾は、翌1863年(文久3)9月ごろから横浜外国人居留地39番のヘボン邸で始まり、これが明治学院の創立であり、女子部は〈フェリス女学院〉の基となりました。

創立の背景と歴史

明治学院の源流であるヘボン塾は〈ミセス・ヘボンの学校〉ともいうべき性格を持っていました。1863年(文久3)クララ夫人がアメリカでの一時帰国から戻ってきて、その年の9月ごろから英語教育を中心に始まったのがヘボン塾の始まりです。

1873年(明治6)に日本の封建的思想統制である「キリシタン禁制の高札」が廃止された翌年8月に、ヘボンはジェームス・H・バラの弟ジョン・C・バラ(John Craig Ballagh1842～1920年)と夫人にヘボン塾を委ねることにし、ヘボン塾はバラ学校と呼ばれるようになります。その後バラ学校は、1880年(明治13)に東京・築地に移り、カレッジ・コースを整えて〈築地大学校〉と改称されました。

築地大学校は、横浜・山手で神学校教育の予備教育を行っていたワイコフ(M.N. Wyckoff 1850～1911年)の〈先志学校〉と1883年(明治16)に合併して〈一致英和学校〉と改称され、4年制大学の〈一致英和学校〉と2年制の予備科〈英和予備校〉に分かれました。当時、我が国には東京大学と大学予備門とが最高の学府で、工部大学校(東京大学工学部の前身)、札幌農学校(北海道大学の前身)などを除いて高等教育機関があまりなかったこともあり、一致英和学校は高等教育を施すハイカラな学校として優秀な青年学生を集めました。勝海舟の三男梅太郎や朝鮮(当時)からの5名の留学生も在籍しています。

一方、ヘボンと協力して聖書の和訳に努めてきたブラウンは、英語教師として横浜英学所、新潟英学校、横浜の修文館で教えてきましたが、契約満了を機に辞任してしまいます。学生たちは失望し、ブラウンの住宅に家塾を開くことを懇願し、ブラウン塾が創設されました。のちにジェームス・バラの塾生たちも合流し、はじめは英学中心でしたが、学生たちの多くがクリスチャンであったことから、あたかも伝道学校のような気風が生まれます。いわゆる横浜バンドの始まりです。井深梶之助、植村正久、本多庸一、押川方義、熊野雄七、奥野昌綱、松平定教、駒井重格、島田三郎など高い志を持ち、のちの日本キリスト教界に重要な役割を果たす青年たちが多く集まりました。

1877年(明治20)アメリカ長老教会、アメリカ・オランダ改革教会、そしてスコットランド一致長老教会の三つのミッションは、東京・築地に〈東京一致神学校〉を合同で設立。ブラウン塾をはじめ、各ミッションの宣教師が主宰する神学塾は東京一致神学校に合流しました。第1回の卒業生には、明治学院創立時に副総理兼神学部教授となった井深梶之助、富士見町教会牧師で明治学院創成に尽力した植村正久など、横浜バンドのメンバーも含まれています。

1886年(明治19)現在地の旧・三田藩の下屋敷に、〈東京一致神学校〉と〈一致英和学校〉と〈英和予備校〉が合同し、〈明治学院〉が発足しました。校名の由来は創設者の一人植村正久の提案で、明治文化のなかに輝く学園の殿堂という意味が込められています。

明治期最大の社会問題といわれる足尾鉾毒事件においては、学生たちが足尾地方に修学旅行を行ない、1903年(明治36)毎日新聞に鉾毒被害者窮状視察旅行の広告を掲載するなど、社会問題への強い関心と行動を起こしています。



創立者 James Curtis Hepburn (1815～1911年)
医療、辞書の編纂、聖書の和訳と多領域の働きをし、
夫妻で献身しました。

